大学の心理教育相談室における学習支援に関する研究 (3)

—学習支援が小学生に及ぼす効果—

○岡 直樹・児玉真樹子・小島奈々恵・深田博己
(広島大学大学院教育学研究科)
キーワード: 学習支援, 小学生, 心理教育相談室

Educational support at a university's clinic of school psychology (3)
Naoki OKA, Makiko KODAMA, Nanae KOJIMA, and Hiromi FUKADA
(Graduate School of Education, Hiroshima University)
Key words: educational support, school students, clinic of school psychology

目 的

広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センターでは、現代 GP「子どもの心と学び支援プログラムの展開」の一環として、地域の小学生（4～6年生）に対し、算数に関する学習支援の提供を行っている。この学習支援は、市川（1993）が提唱する認知カウンセリングの手法に基づき行っている。また、この学習支援プログラムは、算数の学習支援を行う時間と遊びの時間の2部構成となっている。学習支援プログラムへの参加による効果は平成20年度前期から每期検討しているが（児玉他、印刷中a等）、本研究では、平成21年度後期における学習支援が小学生に及ぼす効果を確認する。

方 法

調査方法・時期 調査対象者は2009年10月～2010年2月の間に、ここにこルームで行われた学習支援プログラムに参加した地域の小学生15名（4年生6名（男児2名、女児4名）、5年生6名（男児3名、女児3名）、6年生3名（男児2名、女児1名））であった。プログラム開始時（10月、以下“事前”と表す）とプログラム終了時（2月、以下“事後”と表す）に、質問紙を用いた集合調査を実施した。質問紙は2種類あり、1つは事前調査と事後調査で用いる質問紙で、タイトルは「算数アンケート」であった。質問項目は事前と事後で同一であった。もう1つは事後調査のみで利用する質問紙で、タイトルが「学習カウンセリングについてのアンケート」であった。

調査内容 「算数アンケート」では、算数に関する自己効力感13項目と算数に関する学習観8項目の21項目について4段階で評定させた。いずれも得点が高いほど該当項目に当てはまることを意味した。「学習カウンセリングについてのアンケート」は、大学生の力量による効果に関する小学生の認知として、アセスメントによる効果2項目、授業方法・指導技術による効果6項目、先生（学生）との関係7項目の計15項目、満足度3項目、算数への関心・理解度3項目、遊びへの関心1項目、学習支援プログラムへの要望2項目から構成された。項目は全て「全くそう思わない（1点）」から「非常にそう思う（4点）」の4段階で評定させた。なお、欠損値にはその項目の平均値を代入した。

結 果 と 考 察

事前・事後調査の結果の分析 「算数アンケート」で測定

した21項目を、小島他（印刷中a）による因子構造に基づき、算数に関する自己効力感（9項目）と算数に関する学習観（2項目）の2因子に整理し、各因子の α 係数、平均、標準偏差を算出した（Table 1）。さらに、因子ごとに事前と事後の得点に差があるか検討するため、対応のあるt検定を行った。その結果、2因子とも事前と事後で有意差はみられなかった。平成20年度前期（児玉他、印刷中a）と同後期（児玉他、印刷中b）では算数に関する自己効力感については事前と事後で有意差がみられたものの、平成21年度前期（小島他、印刷中b）と本研究の平成21年度後期ではいずれも有意差がみられなかった。これより算数に関する自己効力感を向上させ、学習観を変えさせることの困難さが示唆された。

事後調査の結果の分析 「学習カウンセリングについての

アンケート」で測定した24項目を、小島他（印刷中a）による因子構造に基づき、大学生の力量による効果に関する小学生の認知2因子（コミュニケーション、理解；9項目）、満足度1因子（3項目）、算数への関心1因子（3項目）に整理し、因子ごとに分析した。各因子の α 、平均値、標準偏差、および、各因子の得点間の相関係数をTable 2に示した。いずれの因子の平均値も3.0以上と高く（1～4点中）、小学生は学習支援を担当している学生に対する力量を高く評価し、学習支援を受けたことで本人の算数に対する関心が高まり、満足度も高かったことが確認された。同様の結果が平成20年度前期から平成21年度前期までの各期の報告（児玉他、印刷中a等）でも確認されており、学習支援プログラムが小学生の算数への関心の向上に効果があることが示された。また、全因子間に有意な高い正の相関がみられ、学生の力量による効果を高く評価しているほど、小学生本人の算数に対する関心も高く、当プログラムへの満足度も高くなることが確認された。

Table 1 事件事後調査の各因子の得点

	事前			事後		
	α	<i>M</i>	<i>SD</i>	α	<i>M</i>	<i>SD</i>
算数に関する自己効力感	.77	2.84	.52	.65	3.00	.45
算数に関する学習観	.71	2.87	.99	.77	2.97	.97

Table 2 事後調査の各因子の得点および因子間の相関係数

				各因子の得点間の相関係数		
				1	2	3
	α	<i>M</i>	<i>SD</i>			
1 学生の力量 : コミュニケーション	.90	3.60	.51			
2 による効果 : 理解	.70	3.54	.49	.74 **		
3 満足度	.80	3.60	.59	.86 ***	.75 **	
4 算数への関心	.84	3.36	.74	.64 *	.88 ***	.67 **

注1 *** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$